

# 一人の学生とのお別れ。

愛知淑徳学園学園長 小林素文



今年の8月12日付で、本学学長が「在学生の皆さんへ」のタイトルで、大学のホームページに次のコメント（概略）をのせました。

「本学学生が不幸な事件に巻き込まれ若い命を失いました。ご本人、並びにご遺族に深い哀悼の意を表します。」

彼女はゼミ活動に積極的に参加し、学業成績もよく、また、課外活動のクラブにも積極的に活動するなど、本学の学生として大学の期待に十分に応える学生生活を送っております。

このたびの事件に巻き込まれることになったモデルの仕事にもまじめに取り組んでおりました。

本学は、このような夢多く豊かな将来を持った彼女が道半ばで前途を絶たれたことをまことに残念に思います。」

※

その学生の告別式が8月13日にとりおこなわれました。

式場では友人がバイオリンを奏でていました。

式がはじまり、読経の中、ご遺族、ご親族、関係者、そして多くの友人達の焼香が長く続き、とどこおりなく式は終了しました。

喪主のお父様が、お母様、故人の

お姉さんと手を取り合って、「お盆のお休み中にもかかわらず、お集まりくださりありがとうございます。私たちは、まだ現実を受けとめることができませんが、やがては受けとめ、家族3人で力を合わせて、亡くなった娘のためにも歩んでいきたいと想います。これからもよろしくお願います。」と会葬御礼をされました。

事件からまだ3日、現実を受けとめられず、悲嘆にくれていて当たりまえなのに、手を取り合い気丈に挨拶をされる姿に、会場はすすり泣きで溢れました。

そして、その姿は故人が愛情あふれる家庭に生まれたことを感じさせ、それだけに「ご遺族の心の中いかにばかりかと胸が痛みました。」

出棺のお見送りのときも、ロビーで友人のバイオリンが奏でられました。

故人が大好きであったという曲が演奏されると、友人たちが、一人また一人と歌いはじめました。故人に届けとの願いのこもった、しめやかで、ささやくような合唱は感動的でした。

感動的でした。

学業が優秀だけでなく、多くの友人を引きつける素晴らしい人柄の故人、そして、亡き友を心をこめて送ってあげようとする友人の学生たちは、本学の誇りです。

心よりご冥福をお祈りし、お別れいたします。

合掌

※

今回、ホームページで在生であってコメントをのせただけでなく、マスコミ各社にファックスで大学の見解を示し、故人およびご遺族の名譽を守ろうとした、新学長はじめ大関係者の対応は適切であったと思います。

愛知淑徳学園には、今一万人をこえる生徒・学生たちがいます。

その一人ひとりに家族があり、かけがえない命であること、このことを教職員一人ひとりが心におき、教育機関としての役割を果たしていきたくと存じます。